

『相互供養、相互礼拝。』

仏さまってどんな方でしょう。

お釈迦さまは、約二千五百年前に原語の音訳で「仏陀・Buddha」と呼ばれて居られました。

この仏陀は、意識では「応供」と言い、供物に応じると言う意味で使われています。

お釈迦さまは、人々が思わず、お供え物を差し上げたくなる様な方で、そのお供え物に応じるだけの徳を備えている方だったと言うことが出来るでしょう。

多くの方々が思わず逢いに行きたくなるお大師さまもまた、この対象となる方だったと言えます。

日本人にとっては、ご先祖さまもまた、供物の対象ですから、当然の如く仏さまとして敬われ、供養され続けて来ました。

意外と解りやすい関係性だと思いますせんか、難しくは無いのです。

ですが、檀信徒の側からして、供物の対象を生きて居る相手に求める事は容易ではありません。

また、僧侶も生きて居る内に、供物の対象となる覚悟を備えていくかどうかとなると、とても厳しいと言わざるを得ません。

そこで、「お供物やお布施をしますから、頑張って修行に励んでください。」という檀信徒の側の希望の精神と、「頂いたからには、一所懸命に修行をして、その負託に応えていこう」と言う僧侶の側の、愚直な生き方こそが、相互に供養し、相互に礼拝し合う、高野山の精神に見合った生き方と言えるでしょう。相互供養、相互礼拝。